

平成28年度 あきたスマートカレッジ (報告)

D連携講座

D9～10： 解読！ アーカイブズ

連携機関： 県公文書館

会場： 秋田県生涯学習センター4階 第1研修室

【趣旨】 歴史資料や公文書館の活動に興味・関心のある方が対象です。歴史資料の利用方法や保存活動についての理解を深める講座です。

講座記号	期 日	テーマ	講 師	参加者数
D9	7月29日 (金)	伝承と史実のあいだに	古文書班 副主幹(兼) 主任学芸主事 (兼)班長 鈴木 満 氏	32
D10	10月28日 (金)	企画展「公文書で見る 秋田の石油開発」をみる	公文書班 副主幹(兼) 主任学芸主事 佐々木 康久 氏	32
合計				64名

公文書館所蔵の歴史資料と、今年度の企画展についてお話いただきました。
ここでは、2回目の講座について報告します。



「秋田の石油のイメージは？」と聞かれたら、60代以上の方は「懐かしい」、50代以下の方は「へー？」と答える方が多いそうです。それもそのはず、秋田の原油産出のピークは60年前。今では油田の櫓も見かけません。日本の原油生産の現状は、自給率0.3%。約30万人分。秋田市の人口程度の需要しか満たせない状況です。しかし現在でも、国産原油の20%程を秋田産が占め、全国第2位の産出を誇っていることはあまり知られていません。

講座では、石油開発には高い技術と多額の資本が必要という問題をかかえながらも、「秋田が『石油王国』になるまでの経過と今を考える」という視点でお話ししていただきました。

はじめに石油開発前史として、縄文時代と江戸時代の石油にまつわるお話がありました。この頃は石油を、防虫防腐防水塗料や墨の原料、神社の灯明などに利用していました。江戸時代の梅津政景日記(寛永8年10月10日)には「くさふつのあふらを…」という記述があり、草生津川周辺で湧出していた石油の売買の記述ではと考える人もいるそうです。明治時代に入り、石油開発の先駆者といわれた藩の御用油商人・千蒲善五郎や、「日本のアスファルト舗装はこの人がいないと10年遅れていた」といわれた黒沢利八が登場し、県内の石油開発が始まります。明治時代中頃になると、秋田県も石油調査生の派遣や秋田石油調査会への協力で地元の実業家による油田開発にてこ入れしたものの、なかなか成果に結びつきませんでした。明治時代末から大正時代になると、県外の大企業が秋田に進出し始めます。油田開発が本格化し、産油地としての秋田の地位が確立しました。そして戦時体制の時代を経て、終戦から高度成長期前半には、国産原油の8割を産出する「石油王国秋田」の時代を迎えました。

講座では全国に名を馳せた秋田の石油・油田の話を、公文書館所蔵資料で、現在の生活と比較させながら、ユーモアを交えて紹介していただきました。「昭和36年第16回国体に昭和天皇が帝国石油秋田鉱業所に来社された頃が思い出された」と当時を懐かしまれる受講者の方もいました。